

令和5度 長野女子高等学校 自己評価

○学校教育目標(めざす学校像)

- ・建学の精神 「梅花不撓風雪」
- ・校訓「礼節」礼儀を重んじ、思いやりの心を持ち、女性らしい温雅と清らかな心を培う。
「創造」自ら知識と技能を体得し、正しく広く追及していく清楚な姿勢と能力を養う。
「自律」責任と義務を自覚し、思慮深い適切な判断で行動できる実践力を養う。
- ・教育目標
 1. 新時代を生きる女性として、自己の夢や希望の実現に向け、困難に挫けず粘り強く努力する力を育成する。
 2. 変化の時代を生き抜く女性として、思いやりの心と社会的常識を備えた人物を育成する。
 3. 一人の女性として、世の中で通用する力、多様な社会を生き抜く実力を備えた人物を育成する。

○令和5年度 重点目標

1. 正しい生活習慣と、気持ちのよい挨拶ができる。
2. 「気づき」の精神で清掃活動に取り組む。
3. 生活のきまり、ルール・マナーの順守を徹底し、規範意識と協調性の向上を目指す。
4. Classiの活用を含め、生徒のやる気と達成感、充実感を味わえる学習活動を展開する。
5. 進路の実現に向けた取り組みと生徒個々の実力の向上を図る。
6. 教員の教育実践力(教科指導と生活指導)を高め、教師として成長できるよう努める。

分野	評価項目	評価の観点	評価 A～C	成果と課題
教育課程	教育課程の研究・改善	令和3年度入学生教育課程と令和4年度入学生教育課程は以前までの教育課程より生徒にとって奏功したか。	B	2019年度入学生(本教育課程では修得単位数を厳選)が卒業し、その進路状況からみると教育課程の変更に伴う教育効果は認められなかった。一方、令和4年度入学生(本教育課程では2年次からのコース選択に変更)は一年次にコースに縛られないことが功を奏した(適切な進路指導、適正判断など)。
		新学習指導要領の編成・施行は完了できたか。	B	学校の実態や特色を考慮しつつ、適切な教育課程を運用している。今年度で旧指導要領の学年が卒業し、旧指導要領の改善事項を中心に、各教科の目標や内容に照らして授業改善等を行っている。
学習指導	基礎学力定着	少人数展開授業、習熟度別授業の実施により、文章読解の力をはじめとする基礎学力の定着と学習意欲の向上が図れたか。	B	R5年度の1クラスの平均人数は25人である。公立高校の半分程度のクラス編成を実現。その環境下に合う教育効果を得られているかは検討の余地がある。
	指導力向上研修の実施	多様な職能向上、職員研修の機会を確保できたか。	A	授業改善のためのリーフレット作成、外部講師による教育研修、校内での実践報告、外部研修会(長野県私学研修会など)、実践・研究報告等、職員研修の機会は相当数実施。
	指導力向上研修の成果	指導力向上研修等を通して、授業の質の向上が図れたか。	C	豊富な研修の一方で、明確な指導力向上、生徒の学力向上(基礎力診断テスト)にはつながっていない。
生徒指導	校則の実践、定着	集団作りの観点から生活のきまりやルール・マナーの順守を図り、生徒が学校生活を安全で楽しいと感じる雰囲気醸成を図れたか。	B	少人数学級による手厚い指導により、学校全体の雰囲気は良い。個別の生徒指導、特に困り感を持つ生徒への支援や生徒に寄り添い改善に導く指導については成果が上がらず積年の課題となっている。
		校則を守るという意識から社会的常識、ルールを守るという規範意識の醸成を図れたか。	B	本校独自の生徒手帳(校則等を記載)を導入して9年目となる。本手帳の使用率は全国的(統一アンケート)にみても高く、学校生活のきまりを守ろうとする全体の意識も高かったのは完全に過去のことになった。
	生活習慣の定着および社会性の向上	挨拶の励行や清掃に関する指導が徹底できたか。欠席、身だしなみなどの指導が家庭との連携のもとで継続的に行われたか。	C	指導に対する家庭の理解、協力は得られている。気持ちの良い挨拶ができ、身だしなみも整っている生徒が多い。一方、生徒の遅刻・欠席が非常に目立った一年で、最重要改善課題のひとつである。
	生徒支援	一人ひとりの生徒に寄り添い、生徒の持つ可能性を伸ばすような支援が行われたか。	C	高校生のあるべき姿を求めるあまり、教員による恣意的な指導が少なからず見受けられた。毅然とした指導も必要な場面はあるが、説諭ばかりでなく生徒に寄り添った支援への転換を徹底することが大きな課題である。
進路指導	進路指導	高校卒業後の生き方を踏まえて自ら進路決定に向けた力を育成できる進指ができたか。	B	進路ガイダンス、総合探究などで生徒一人ひとりが自己と向き合いながら進路について考え、自ら課題解決に向けて取り組む活動を行った。今年度は進路未決(家居)がなく、進学・就職への支援ができた。
	キャリア教育の確立	課題研究の取り組みやサマーチャレンジボランティアなどの課外活動への積極的な取り組みが図れたか。	B	コロナの影響で実施を見送っていた職場体験、ボランティアの実施を再開した。職業理解、福祉や奉仕の心の育成につなげることができた。ただ、学校による半強制ではなく、生徒の自発的な取り組みを促す支援に移行させた。
開かれた学校	情報提供	学校の取り組みをホームページ、オクレンジャー、学年通信等の配布物を通して情報発信ができたか。	A	毎日のホームページ更新はもとより、学年通信(2学年以外は毎月発行)やオクレンジャー(緊急連絡網)を通して学校生活の様子や本校の感染症対策などについて伝えることができた。
	地域活動	生徒会、部活動などが地域のイベントに参加したり、清掃などの活動に参加し、交流を深めることができたか。	A	今年度はコロナによる影響を受けず、従来の地域活動を実施できた。三輪地区の夏期学校や秋祭りを共催するなど、多くの活動を再開することができた。
	PTA活動	PTA活動に参加したか。クラス、学年、地区PTA、オクレンジャーなどにより保護者の声を吸収できたか。	A	例年実施してきたPTA活動はコロナ禍において停滞していたものの、2025年度の本校100周年を見据えた「PTA白梅文庫」の創設など新しい取り組みを実施することができた。

A: 評価できる B: 概ね良い C: 不十分